

# 設楽発掘通信

No.66  
令和3年  
11月号

## 下延坂遺跡の地元説明会を開催しました

9月26日(日)に下延坂遺跡で地元説明会を開催いたしました。当日は残念ながら雨天で、現場に入つて目玉の竪穴建物跡を見ていただくことはできませんでしたが、遺物の展示を実施しました。雨の中お越しいただいた方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。

また、当日配布した資料はインターネットから閲覧が可能となっております。ご興味がお有りでしたら以下のアドレスをご利用ください。

今年度の設楽ダム関連調査では、今後、大崎遺跡での地元説明会を予定しています。調査の工程上、具体的な日時は未定となっておりますが、決まり次第告知させていただきます。ご期待ください。

(河嶋優輝)

下延坂遺跡・地元説明会資料 URL

<http://www.maibun.com/DownDate/PDFdate/gensetsu/20210926Shimon.pdf>



公開予定だった竪穴建物跡

下延坂遺跡位置図



年表

年	内容
2019年	設楽ダム建設に伴う発掘調査開始
2020年	下延坂遺跡の発掘調査完了
2021年	下延坂遺跡の地元説明会開催
2022年	大崎遺跡の地元説明会開催予定

設楽ダム建設に伴う発掘調査  
下延坂遺跡

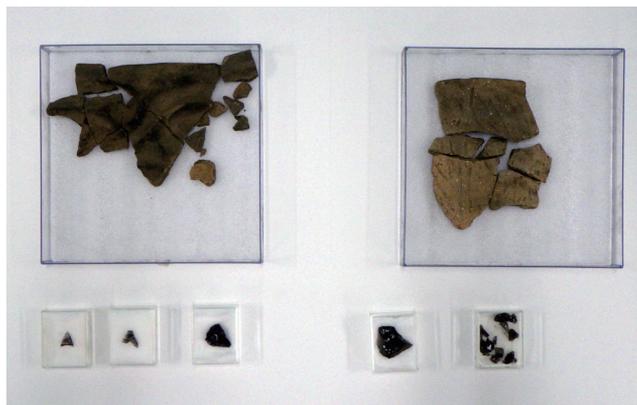


下延坂遺跡調査(中前:21B-C区 奥:21A区)



21A区作業の様子 21B区作業の様子

説明会資料



展示に使用した遺物



当日の様子

### 大崎遺跡発掘調査

調査開始から二ヶ月ほど経ち、21A区の表土掘削・検出作業が完了し、全体像が見えてきました。

まず、21A区の水田の跡が全面に広がっていることがわかりました。(図1 青線が水路、緑線が畦畔)。この水田の時期は弥生時代の後期から中世前半までのいずれかの時期と考えられます。設案町においてこの時期の水田跡の全貌が捉えられた例は無く、貴重な調査になると思われます。また、調査区の南東ではやや地形が下がっており、水田跡は確認できませんでしたが、弥生時代中期前半のと考えられる竪穴建物跡がまとまって見つかっています(図1茶線)。遺物についても豊富に出土しております。弥生時代の遺物は各時期の土器片や刃器が出土しました。縄文時代の遺物は後期・晩期にかけての土器片や石匙などの石器類、石棒・岩偶岩版といった石製品が出土しており、現在調査を行っている層位より下に縄文時代の遺構がある可能性が出てきました。今後は水田跡の調査を中心に進めていきます。続報にご期待ください。(社本有弥)

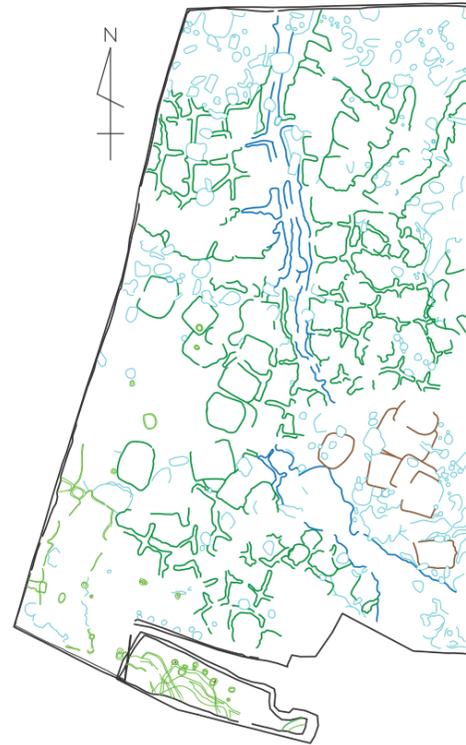


図1 大崎遺跡 21A区全体図 (1/1000)

### 下延坂遺跡発掘調査

下延坂遺跡では、C区の調査を開始しました。検出作業の結果、調査区の西側と南側、東側の一部に遺構が確認されました(図2)。現在は西側と南側の遺構の調査を優先し行なっております。

西側南側では縄文時代中期・後期の土器片や石器が出土し、調査区の南端では竪穴建物跡が3棟、重なって確認されました(図2赤丸・図3)。炉や柱穴などの付属施設は現在調査中です(図4)。南側では西側とは異なる土の堆積が見られました。石器の出土が増加し、西側で出土していたものと比べ大形であるため、時期が異なると思われます。また、縄文時代早期の土器である繊維土器なども確認されています。そのため、南側では縄文時代でも古い時期の遺構が見つかる可能性があります。東側は複数の遺構が確認されました。時期についてはこれから検討していきます。遺物はまだ少ないですが黒曜石の石器が確認されています。(渡邊 峻)



図2 下延坂遺跡 C区全体図 (1/1000)



図3 竪穴建物跡(3基)検出



図4 竪穴建物跡(2146SI)遺構検出状況

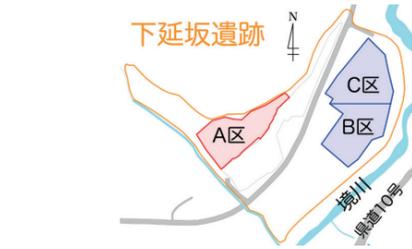


図5 B区縄文時代中期後半の竪穴建物跡 (赤の破線内が建物)



図8 縄文時代中期後半の竪穴建物跡 (10/14時点、石を撤去した状態) 図7 縄文時代中期後半の竪穴建物跡 (10/1時点、詰められた石が現れた状態) 図6 縄文時代中期後半の竪穴建物跡 (9/26時点、掘り下げる前の段階)

下延坂遺跡B区での調査は大詰めとなっています。残った竪穴建物2基のうち、1基は掘削が完了しました。中央に石囲炉があり、全体としては隅が丸まった四角、すなわち隅丸方形の形をした住居であることが判明しました(図5)。

もう片方の住居は(図6~8)、住居の廃絶(≡使われなくなる)後に石が大量に詰められており、その石の数は600点を超えることが判明しました。石が詰められた遺構は、縄文時代の中部から関東地方に分布するとされており、今回の調査によって新たな事例が加わることとなります。

また、炭化した木材や焼けた土などが出土しており、建物の廃絶の際、建築部材を燃やすといった儀礼的な行為が行われた可能性も考えられます。

下延坂B区の建物跡に関しては、次号で最終的な調査結果をお知らせできるかと思えます。ご期待ください。(河嶋優輝)

# 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡出土の弥生土器

今回は令和2年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査で見つかった、周堤が巡る竪穴建物跡1055SIから出土した弥生土器についてご紹介します。

1055SIは何回か建て替えられており、最後の建て替えた床面から残りの良い弥生土器が5点出土しています(図9・10)。5点とも煮炊きに使われた甕で、弥生時代中期後葉(紀元前1世紀)の土器と考えられます。これらの土器を形や文様、作り方で分けると、1、3、4、5と大きく三つのグループに分かれます。1、3の土器は凹線文系の甕で、尾張地方では「高蔵式」、三河地方では「長床式」などと呼ばれています。凹線文系土器は瀬戸内地方で誕生して近畿地方を経由し、弥生時代中期後葉の前半には尾張地方を含んだ伊勢湾西部まで分布範囲が拡大していきます。さらに後中期後葉の後半になると三河から関東にまでその範囲が広がります。4の土器は「古井式」と呼ばれる三河系の甕で、外面の「撫で」調整や高い脚が特徴となります。5は信州系の甕で、「栗林式」または「北原式」と呼ばれ、受け口状の口縁部と外面の文様が特徴です。文様には「波状文」・「簾状直線文」・「羽状文」の他、口縁部に付けられた「円形浮文」が見られます。また底部には、土器製作時に粘土が付着しないように敷いた「布目圧痕」があり、これも特徴のひとつとなつています。



図9 これら出自の異なる土器を結びつけた要因のひとつに、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡が奥三河地方の設楽町に位置するという地理的条件があります。また弥生時代中期後葉には信州系の土器は愛知県ではわずしか出土しておらず、今回の出土は極めて稀な事例と言えます。今後凹線文系・三河

系の土器を含め、弥生時代中期後葉の土器の動きがどのようなものであったのかが問題となってきます。さらに見た目も形も違う器を、当時の人たちはどう考えて使っていたのか、これも興味深い問題です。  
(宮腰健司)

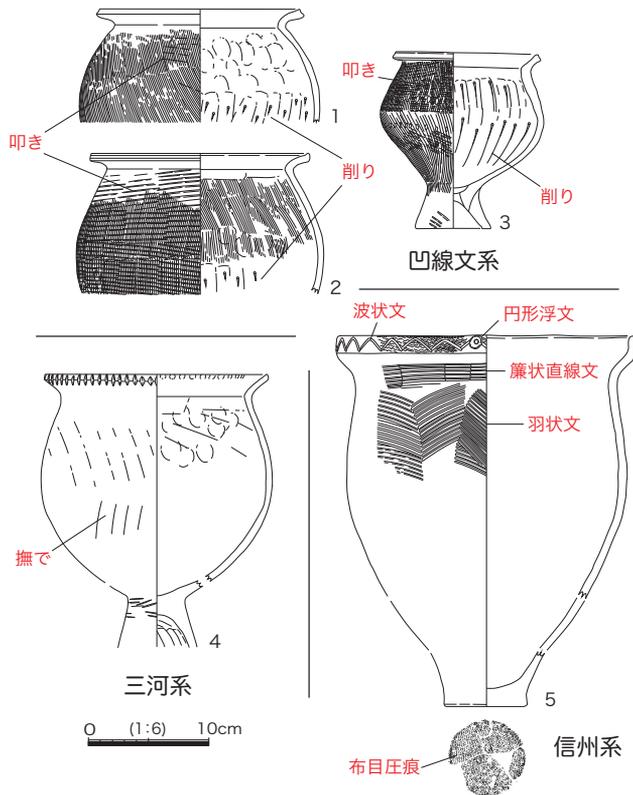


図10 1055SI出土の弥生土器

## 設楽発掘通信 No.66 令和3年11月号

編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24  
電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】  
ホームページ <http://www.maibun.com>  
Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>  
Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)  
印刷・協力 株式会社イビソク

